

若い木霊

宮沢賢治

「ふん。こいつらがざわざわざわざわ去っていたのは、ほんの昨日のようだったがなあ。天^{たいてい}抵^{てい}雪^{ゆき}に潰^{つぶ}されてしまったんだな。」

それから若い木^こ霊^{たま}は、明るい枯^か草^{くさ}の丘^{おか}の間を歩いて行きました。

丘^{かみ}の窪^{くぼ}みや皺^{しわ}に、一きれ二きれの消え残りの雪が、まっしろにかがやいて居ります。

木^こ霊^{たま}はそらを見ました。そのすきとおるまっさおの空で、かすかにかすかにふるえているものがありました。

「ふん。日の光がふるふるやってやがる。いや、日の光だけでもないぞ。風だ。いや、風だけでもないな。何かこう小さなすきとおる^{すがる}蜂^{はち}のようなやつかな。ひばりの声のようなもんかな。いや、そうでもないぞ。おかしいな。おれの胸までときどき云いやがる。ふん。」 若い木^こ霊^{たま}はずんずん草をわたって行きました。

丘^{かみ}のかげに六本の柏^{かしわ}の木が立っていました。風が来ましたのでその去年の枯れ葉はザラザラ鳴りました。

若い木^こ霊^{たま}はそっちへ行って高く^{高く}叫^こびました。

「おおい。まだねてるのかい。もう春だぞ、出て来いよ。おい。ねぼうだなあ、おおい。」 風がやみましたので柏^{かしわ}の木はすっかり静まってカサツとも云いませんでした。若い木^こ霊^{たま}はその幹に一本ずつすきとおる大きな耳をつけて木の中の

音を聞きましたがどの樹^きもしんとして居りました。そこで

「えいねぼう。おれが来たしるしだけつけて置こう。」と云いながら柏^{かしわ}の木の下の枯れた草^{くさ}穂^ほをつかんで四つだけ結び合いました。

そして又ふらふらと歩き出しました。丘^{かみ}はだんだん下って行って小さな窪地^{くぼち}になりました。そこはまっ黒な土があたたかにしめり湯気はふくふく春のよろこびを吐いていました。

一定の^{ひき}墓^{ひきがえる}がそこをのそのそ^は違って居りました。若い木霊はギクツとして立ち止まりました。

それは早くもその墓の^{ことば}語を聞いたからです。

「鶺鴒の火だ。鶺鴒の火だ。もう空だって^{あお}碧くはないんだ。

桃色のペラペラの寒天でできているんだ。いい天気だ。

ぽかぽかするなあ。」若い木霊の胸はどきどきして息はその底で火でも燃えているように熱くはあはあするのです。木霊はそっと窪地をはなれました。次の丘には^く栗の木があちこちかがやくやどり木のまりをつけて立っていました。

そのまりはとんぼのはねのような小さな黄色の葉から出来ていました。

その葉はみんな遠くの青いそらに飛んで行きたそうでした。

若い木霊はそっちに寄って叫びました。

「おいおい、栗の木、まだ^{ねむ}睡ってるのか。もう春だぞ。おい、起きないか。」

栗の木は^{おさま}黙ってつめたく立っていました。若い木霊はその幹にすきとおる大きな耳をあててみましたが中はしんと何の音も聞こえませんでした。

若い木霊はそこで^{ちよつと}一寸意地悪く笑って青ぞらの下の栗の木の^{こずえ}梢^{あおい}を仰いで^{きん}黄金色のやどり木に云いました。

「おい。この栗の木は貴様らのおかげでもう死んでしまったようだよ。」やどり木はきれいにかがやいて笑って云いました。

「そんなこと云っておどそうたって^{がめ}駄目ですよ。睡ってるんですよ。僕下りて行ってあなたと一緒に歩きましょうか。」

「ふん。お前のような小さなやつがおれについて歩けると思うのかい。ふん。さよならっ。」やどり木は黄金色のべそをかいて青いそらをまぶしそうに見ながら「さよなら。」と答えました。

若い木霊は思わず「アハアハハハ」とわらいました。その声はあおぞらの^{なめ}滑らかな石までひびいて行きましたが又それが波になって戻って来たと

き木霊はドキツとしていきなり^{せき}壁^{おき}く胸を^{おき}押えました。

そしてふらふら次の窪地にやって参りました。その窪地はふくふくした苔に覆われ、所々やさしいかたくりの花が咲いていました。若い木だまにはそのうすむらさきの立派な花はふらふらうすぐろくひらめくだけではっきり見えませんでした。却ってそのつやつやした緑色の葉の上に次々せわしくあらわれては又消えて行く紫^{むらさきいろ}色のあやしい文字を読みました。

「はるだ、はるだ、はるの日はきた、」字は一つずつ生きて息をついて、消えてはあらわれ、あらわれては又消えました。

「そらでも、つちでも、くさのうえでもいちめんいちめん、ももいろの火がもえている。」

若い木霊ははげしく鳴る胸を弾けさせまいと堅く堅く押えながら急いで又歩き出しました。

右の方の象の頭のかたちをした灌木^{かんぼく}の丘からだらだら下りになった低いところを一寸越しますと、又窪地がありました。

木霊はまっすぐに降りて行きました。太陽は今越えて来た丘のきらきらの枯草の向うにかかりそのななめなひかりを受けて早くも一本の桜草が咲いていました。若い木霊はからだをかがめてよく見ました。まことにそれは蛙のことばの鶉の火のようにひかってゆらいで見えたからです。桜草はその靱やかな緑色の軸^{しほ}をしずかにゆすりながらひとの聞いているのも知らないで斯うひとりごとを云っていました。

「お日さんは丘の髪毛の向うの方へ沈んで行ってまたのぼる。

そして沈んでまたのぼる。空はもうすっかり鶉の火になった。

さあ、鶉の火になってしまった。」若い木霊は胸がまるで裂けるばかりに高く鳴り出しましたのでびっくりして誰かに聞かれまいかとあたりを見まわしました。その息は鍛冶場のふいごのよう、そしてあんまり熱くて吐いても吐いても吐き切れないのでした。

その時向うの丘の上を一^{びき}定のとりがお日さまの光をさえぎって飛んで行きました。そして一寸からだをひるがえしましたのではねうらが桃色にひらめいて或いはほんとうの火がそこに燃えているのかと思われました。若い木霊の胸は酒精^{スルコシ}で一ぱいのようにになりました。そして高く叫びました。

「お前は鶇という鳥かい。」

鳥は

「そうさ、おれは鶇だよ。」といいながら丘の向うへかくれて見えなくなりました。若い木霊はまっしぐらに丘をかけのぼって鳥のあとを追いました。丘の頂上に立って見るとお日さまは山にはいるまでまだまだ間がありました。鳥は丘のはざまの蘆あしの中に落ちて行きました。若い木霊は風よりも速く丘を駆けおりて蘆むらのまわりをぐるぐるまわって叫びました。

「おおい。鶇。お前、鶇の火というものを持ってるかい。持ってるなら少しおらに分けて呉れないか。」

「ああ、やろう。しかし今、ここには持っていないよ。ついてお出で。」
鳥は蘆の中から飛び出して南の方へ飛んで行きました。若い木霊はそれを追いました。あちこち桜草の花がちらばっていました。そして鳥は向うの碧いそらをめがけてまるで矢のように飛びそれから急に石ころのように落ちました。そこには桜草がいちめん咲いてその中から桃色のかげろうのような火がゆらゆらゆらゆら燃えてのぼって居りました。そのほのおはす

きとおってあかるくほんとうに呑のみたいくらいでした。

若い木霊はしばらくそのまわりをぐるぐる走っていましたがとうとう「ホウ、行くぞ。」と叫んでそのほのおの中に飛び込みました。

そして思わず眼をこすりました。そこは全くさっきひきがえる 曇曇がつぶやいたような景色でした。ペラペラの桃色の寒天で空が張られまっ青な柔らかな草がいちめんでそのところどころ 処と々とにあやしい赤や白のぶちぶちの大きな花が咲いていました。その向うは暗い木立で怒鳴りや叫びががやがや聞えて参ります。その黒い木をこの若い木霊は見たことも聞いたこともありませんでした。木霊はどきどきする胸を押えてそこらを見まわしましたが鳥はもうどこへ行ったか見えませんでした。

「鶇、鶇、どこに居るんだい。火を少しお呉れ。」

「すきな位持っておいで。」と向うの暗い木立の怒鳴りの中から鶇の声がしました。

「だってどこに火があるんだよ。」木霊はあたりを見まわしながら叫びました。

「そこらにあるじゃないか。持っといで。」鶉が又答えました。

木霊はまた桃色のそらや草の上を見ましたがなんにも火などは見えませんでした。

「鶉、鶉、おらもう帰るよ。」

「そうかい。さよなら。えい畜生。スペイドの十を見損っちゃった。」と鶉が黒い森のさまざまのどなりの中から云いました。

若い木霊は帰ろうとしました。その時森の中からまっ青な顔の大きな木霊が赤い瑪瑙のような眼玉をきよろきよろさせてだんだんこっちへやって

参りました。若い木魂は逃げて逃げて逃げました。

風のように光のように逃げました。そして丁度前の栗の木の下に来ました。お日さまはまだまだ明るくかれ草は光りました。栗の木の梢からやどり木が鋭く笑って叫びました。

「ウワーイ。鶉にだまされた。ウワーイ。鶉にだまされた。」

「何云ってるんだい。小っこ。ふん。おい、栗の木。起きろい。もう春だぞ。」

若い木霊は顔のほてるのをごまかして栗の木の幹にそのすきとおる大きな耳をあてました。

栗の木の幹はしいんとして何の音もありません。

「ふん、まだ、少し早いんだ。やっぱり草が青くならないとな。おい。小っこ、さよなら。」若い木霊は大分西に行った太陽にひらりと一ぺんひらめいてそれからまっすぐに自分の木の方に向け戻りました。

「さよなら。」とずうっとうしろで黄金色のやどり木のまりが云っていました。